

唐朝雲南経営史の研究(其三)

— 雲南経営の挫折 —

藤 沢 義 美

A Study on the History of the T'ang's Administration to Yun-nan (III)

— The Frustration of the T'ang's Administration to Yun-nan —

YOSHIMI FUJISAWA

1 南詔の勃興

唐朝の雲南経営を挫折せしめた直接原因は南詔部族の勢力増進であつた。南詔とは新唐書卷 222 上南蛮伝(以下唐書南蛮伝上と略記)に

①南詔或曰鶴拓，曰龍尾，曰直畔，曰陽劍，本哀牢夷後，烏蛮別種也。夷語王為詔。其先渠帥有六，自號六詔。曰蒙雋詔，越析詔，浪穹詔，遼睭詔，施浪詔，蒙舍詔，兵埒不能相君。……中略……蒙舍詔在諸部南，故称南詔。居永昌姚州之間鉄橋之南。

と述べている。即ち、六詔とは大理盆地帯に割拠していた部族群であり、その一詔たる蒙舍詔は大理盆地の中心部近くの蒙舍川(現在の蒙化県)に位置し、六詔中で最南部に居つたから南詔と呼ばれたもので、その部酋一族の姓は「蒙」であつたことは蛮書六詔第三に「蒙舍一詔也。居蒙舍川。在諸部之南，故称南詔也。姓蒙。」とあることから知られる。

「詔」とは「夷語の王は詔と為す」といい、今日ビルマ語で王のことを Tsaubva といい、タイ語では Chao 又は Chaohpa といい、即ち Tsau, Chao は王の義であり、bva, hpa は天の義であることから推して、詔(中国音 Chao)は Tsau, Chao と語源上は同一のものらしく、従つて「詔」は王の意であり、「南詔」とは「南の王」を意味する。

六詔の名称及びその住地については既に鈴木・曾我部両教授の論考があるから、ここには詳論しない¹⁾。資治通鑑(以下通鑑と略記)卷 214 開元26年条には六詔名を蒙舍・蒙越・越析・浪穹・機備・越澹となし、原註において「考異曰、新書六詔曰蒙雋・越析・浪穹・遼睭・施浪・蒙舍、今從竇滂雲南別錄。」といい、その根拠を明らかにしている。この「雲南別錄」は唐書卷58 芸文志史部地理類に「竇滂雲南別錄一卷」とあり、宋史卷 204 芸文志史部地理類にも同じくみえており、その著者竇滂は唐末咸通8年(867)唐将李師望に代つて南詔軍と大渡河附近に交戦した人であるから、この書の史料価値は高い。しかし、唐書南蛮伝の記事は蛮書に拠つてゐるが、その著者樊綽も又咸通年間に南詔と交戦した人であり、蛮書は現存せる唯一の唐代雲南地方関係の地理書である²⁾。鈴木教授は両書の一致せざる三詔について、機備は遼睭の、蒙越は蒙雋の、又、越澹は施浪のそれぞれ別称であろうと推定している。六詔の住地については、従来の考証に鈴木・曾我部両教授の説を表示する。

1) 鈴木俊，南詔の意義及び六詔の住地に就いて，東洋学報，第19巻第2号

曾我部静雄，越析詔(磨些詔)及び磨些蛮の住地について，史学雑誌，第43編第4号

2) 蛮書は宋史芸文志には「雲南志」といい、永樂大

典には「雲南志記」といい、太平御覽には「南夷志」といつている。今刊本は、一たん散逸したものを永樂大典から蒐録したもので、固より完全なものではない。むしろ、唐書南蛮伝の方が原史料を保存しているからその記事は信頼度が高い。

六詔の住地比定の諸説

諸説 六詔	中国の地誌類	鈴木氏説	曾我部氏説
蒙雋詔	建昌(寧遠府)	小雲南	小雲南
越析詔	麗江	賓川洲	賓川説を認める。但し鈴木氏説を補訂している。
浪穹詔	浪穹	浪穹	浪穹
遼賧詔	遼川	遼川	遼川
施浪詔	蒙次和山下地	鶴慶或は麗江	蒙次和山下、蒙次河説をとる。
蒙舍詔	蒙化	蒙化	蒙化

南詔の勃興に関する原因やその過程及び当時の雲南状勢については、他日別稿をもつて詳細の予定であるから、本稿ではその梗概だけを述べ、唐朝の雲南経営との関連からみていくに止める。

唐代南詔勃興以前の雲南地方には、T'ai 族系と目される白蛮種が昆明・大理の二大盆地帯に広く分布しており、他方 Tibet-Burma 族系とみなされる烏蛮種がその北方から東北方に広がっていて、前者は史的にみて東方から西方への移動方向を示しているのに対し、後者は北から南下の態勢にあつたから、当時雲南省の両心臓部たる二大盆地は両種族の分布が交錯状態にあり、対立葛藤の場であつた。六詔は史料①に「烏蛮別種也」とあるように、烏蛮種に属するもので、¹⁾ 早くから大理盆地帯に南下定着した部族群であり、その南に位置した南詔がやがて他の五詔を併合し、更に先住の白蛮種族をも圧倒して一大国家を形成したのである。

南詔の3代盛羅皮と4代皮羅閣の間(720?~748)が勃興期に当り、5代閣羅鳳と6代異牟尋の頃(748~808)は南詔国の建設期に当る。特に急速なる勃興をみた皮羅閣の頃は、唐朝の開元の治世に当り、雲南経営が再開されて「歩頭路」の開発が強行され、他方、吐蕃勢力が執拗に雲南方面へ滲透しつつあつた時である。

雲南の歴史が中国側の史書に登場して来るのは前漢代からであるが、その中心舞台は常に大理盆地帯であつた。この地は古くより文化の進んだ民族(白蛮種系とみなされる)が居つて一つの勢力圏を形成していたことが窺われるが、²⁾ 唐代に入つても西方の大理盆地帯に張姓大部酋の勢力圏と東方の昆明盆地帯に爨姓大部酋の勢力圏とが並存し、この東西二大勢力圏が対立していたことが認められる。ところで、東方の爨姓勢力圏は南詔勃興の頃まで(玄宗の天宝年間)存続したのに対し、西方の張姓勢力圏は唐代に入つて次第に衰亡の途をたどり、遂に太宗の貞觀末年頃(649頃)その中心勢力が崩壊したと思われる。

その理由は第一に隋唐勢力の雲南進出による圧力であつた。隋唐朝の雲南経営を通観するに、東方の爨姓部族は比較的親唐的であつたのに対して、大理盆地帯は常に強い抵抗を示し仲々その支配を掌握することが出来なかつた。これは相当の文化と古い歴史を持つ張姓勢力圏が中国王朝勢力の進出を喜ばなかつたことを物語るものである。けれども、雲南経営の推進に伴う相次ぐ征討によつ

1) 蛮書、六詔第三にも「六詔並烏蛮」とある。南詔の民族系統問題は古来内外の諸研究者によつて、種々の説が提唱されている。管見については別稿において論述するはずである。

2) 南詔野史卷上には、南詔国成立以前此処に興亡した国々として、鄯闐、白崖、昆彌、滇国、白子国、建寧等を挙げている。

て打撃を受け、特に貞観末からの大征討の結果遂に瓦解したものらしい¹⁾。第二の原因は烏蛮種の南下滲透による圧迫である。六詔の分布が示す如く、烏蛮種は次第に白蛮を圧迫しつつ大理盆地帯へ南下の形勢を示していたのである。

張姓による一大勢力圏が消滅してから南詔が勃興するまでの約百年間は、いわば過渡期の無政府状態で大理盆地一帯は白蛮種の諸部酋が割拠し、これに烏蛮種の六詔が混在して、互に対立抗争を続けていた。南詔勃興の事情はこれらの諸状勢を考察することによつて知られるのである。

南詔が樞頭するに至つた原因については種々の点を挙げ得るが、これを要約すれば、第一の点はその占居せる地理的位置の優位性であつた。肥沃な農耕地たる大理盆地の中心部に占居し、古い歴史を有する白蛮文化の中心地に近かつたことは、その文化に対する吸収消化を容易ならしめた。殊にこの地方が雲南地方の心臓部だつたのは、四川～雲南～ビルマルートの要衝に當つていたことで、中国印度両東西文化交流の交接地点であり、又蜀川地方と印度ビルマ方面との民間交易上の仲継地点でもあつたから、文化上でも経済上でも重要地点であつた。²⁾大理盆地が早くより開化していたのもこの地理的位置の故であり、南詔が勃興した文化的経済的背景もここにあつたのである。

第二の点は、南詔が早くより唐朝の雲南經營に協力し、常に親唐的態度をとつて密接な交渉關係を続け、唐の文化を吸収摂取したことである。その漢文化摂取については既に発表してあるから、

³⁾ 以下に唐朝との交渉關係を述べることにする。

前述の如く、大理盆地帯の白蛮種は常に唐朝の雲南經營に対して抵抗を示したのに比し、南詔蒙氏のみは早くより唐朝と親交を保つて来た。唐書南蛮伝上によれば、初代細奴羅の時既に高宗へ使者を派遣して入朝し、次代羅盛炎も武後の時に身から入朝している。⁴⁾羅盛炎末年頃は吐蕃の進出によつて雲南經營は後退し、雲南諸夷が吐蕃に附して反唐的だつたのに対し、南詔のみは独り唐朝に附していたことは南詔野史卷上羅盛炎条に「姚州蛮叛，歸吐蕃。…於是，姚雋路絶。而盛炎独奉唐正朔。」とみえることから窺える。従つて、3代盛羅皮即位するや唐朝より特進台登郡王に封ぜられ、翌開元2年(714)彼は張建成を遣わして唐に入朝せしめた。⁵⁾彼の在位は開元初年頃からの約15年間で、南詔はこの頃から次第に樞頭して来たらしく、滇雲歷年伝卷4に「(開元元年)十月姚雋蛮寇，姚州都督李蒙死之。是年，盛羅皮始用兵於五詔。」と見え、⁶⁾五詔に対して併合の姿勢を示す程になつていたものらしい。

4代皮羅閣は南詔勃興期の英主で、南詔国成立の基礎はこの王によつて築かれた。彼は唐朝を背景にしつつ巧みに大理盆地の支配権を掌握した。

開元17年(729)唐朝が雋州方面の吐蕃勢力を駆逐した際、王は清平官(南詔の宰相)張羅皮を派遣して協力せしめた功により、唐より永昌郡都督に任ぜられたが、⁷⁾彼が大理盆地帯の白蛮系諸部酋や他の五詔を征服してその支配権を掌握するに至つたのは開元末年のことであつた。唐書南蛮伝上にはこの間の事情を次の如く述べている。

②開元末，皮羅閣逐(洱)河蛮，取大和城，又襲大磴城守之，……中略……以処閣羅鳳。天子詔，

1) 拙稿、唐朝雲南經營史の研究、第3項第4項参照(本研究年報第10巻)

2) 拙稿、古代東南アジアの文化交流——ビルマ雲南ルートを中心に——、歴史教育、第5巻 第5号

拙稿、ビルマ雲南ルートと東西文化の交流——南詔国の文化系統に關聯して——、岩手史学研究、第25号

3) 拙稿、南詔国に於ける漢文化(本研究年報第3巻)

4) 旧唐書南詔伝、蛮書卷3、南詔野史卷上には唐書より詳しい記事がみえる。

5) 唐書南蛮伝上、南詔野史卷上、尚滇雲歷年伝卷4には、張建成が唐より浮図像と仏書を持ち帰り、又盛羅皮の奏請に応じて唐朝は工匠を遣わして崇聖寺や宏寺等の寺や仏像を建造したことを述べている。

6) 南詔野史卷上に「開元九年，皮叛唐」とあるのもこの間の事情を物語っているのかも知れない。尚、姚州都督李蒙の死については唐書卷5玄宗本紀開元元年10月条にもみえている。

7) 滇雲歷年伝、卷4

賜皮羅閣名煇義。當是時，五詔微，煇義獨彊，乃厚以利啖劍南節度使王昱，求合六詔為一。制可。煇義已并群蠻，遂破吐蕃，寔驕大。入朝天子亦為加禮。又以破洱（河）蠻功，馳遣中人，冊為雲南王，賜錦袍金細帶七事。於是，徙治大和城¹⁾。

これによれば、南詔は唐勢力を背景に唐朝雲南経営推進上の痛であつた洱海附近の白蛮種諸部酋勢力を打倒したので、その功により煇義の名を賜い更に雲南王に冊立されるに至つたのである²⁾。南詔は機を失せず他の五詔も続いて征服し、その背後にあつて南下を狙つていた吐蕃勢力をも駆逐して大理盆地の支配権を掌握し、今の大理市北隣の大和城に遷都し³⁾、南詔国成立の基礎が固められた⁴⁾。

ここで、なぜ唐朝側では斯様に南詔勢力の拡張を容認するような態度をとつたかと言う疑問が生じるが、これについては、玄宗代の雲南経営史を克明にみて来るとその間の事情をよく知り得るのであつて、玄宗代の雲南経営は初唐時代のとその方策や目標に大分異つた所がみられ、それは前の経営の如く唐の領域を拡張してその地を中国化するのではなくて、専ら「歩頭路」の開発に主眼を置いていた。従つて、大理盆地の平定はそれへの前提条件として必要ではあつたが、同盆地の支配そのものが、目標ではなかつた。だから吐蕃勢力を背景に根強い抵抗を続ける西洱河諸蛮の討平には「以夷制夷」の策により南詔を利用したのである。

この間の征討に当り、南詔軍の陣頭に立つて常に戦功を挙げたのは王の長子閣羅鳳であつた⁵⁾。彼は唐朝より初めに右領軍衛大將軍兼陽瓜州刺史を授けられ、次いで左領軍衛大將軍を加えられ、更に左金吾衛大將軍に遷され、遂には特進都知兵馬大將を拜し、上柱国をも賜つた⁶⁾。これは彼が次々と他部族を討平して行く度に授けられたものとみられ、ここにも、唐朝が南詔の力を利用して大理盆地平定に当らしめたことが知られる。

かくて、唐朝は大理盆地帯の不安がなくなつた開元末年頃より、「歩頭路」を中心に雲南経営を本格化するに至つたのである。唐朝は「歩頭路」開発を進めるに当り、その根拠地として昆明市の西隣に安寧城を築き、塩井を占拠し勞役食糧等を徴發して原住民を苦しめた。当時の昆明盆地帯には白蛮種の爨姓一族が一大勢力圏を形成して居り、安寧の地には大部酋爨崇道一族が拠つていた処でもあつたから、従来比較的親唐的だつたこの一族も、当時の爨姓諸部酋間の内紛に対する拙劣な唐側の干渉策と相俟つて反抗的態度に變じ、交通開発事業を妨害した。そこで、唐朝はこれを鎮圧するに当り再度南詔の力を利用したのである。この間の事情については既に前稿の第3項に詳述してあるが、大理盆地帯を掌握した南詔にとつて、次の目標は当然昆明盆地の制覇にあつたのであるから、まさに好機逸すべからずであり、唐勢力を背景としつつ次第に爨姓勢力の瓦解に着手した。

そこで、唐朝はますます南詔を厚遇し、唐書南蛮伝上によれば「天宝初、遣閣羅鳳子鳳迦異，入宿衛，拜鴻臚卿，恩賜良異⁷⁾。七載，煇義死，閣羅鳳立襲王，以其子鳳迦異為陽瓜州刺史⁸⁾。」と述べている。しかし、かように雲南地方の実勢力を掌握し、次第に一大勢力圏を形成しつつあつた南詔にとつては、もはや唐の勢力と支配が雲南地方に存在すると言うことは好ましくなくなつて来た

1) 旧唐書南詔伝；唐会要，卷99，南詔条；通鑑，卷214，開元26年条にもほぼ同様の記載がある。

2) 通鑑はこれを開元26年(738)9月戊午のこととしている。

3) 旧唐書南詔伝は大和城への遷都を開元27年のこととしている。

4) 南詔野史卷上や真異曆年伝卷4には南詔が大理盆地を平定する次第を詳述しているが、その年次や次第が唐書南蛮伝上等と一致しない点が多い。

5) 南詔德化碑文(金石萃編，卷160所収)

6) 南詔野史卷上はこれを天宝3年のこととしている。

7) 南詔野史卷上にはこれを天宝5年とし、更に「妻以宗室女，賜龜茲樂一部」と見えている。滇雲曆年伝卷4は天宝4年のこととしている。

8) 南詔德化碑文には、天宝七載、……皇上……遣中使黎敬義，持節冊襲雲南王。長男鳳迦異，時年十歲，以天寶入朝，授鴻臚少卿，因冊襲，次又加授上卿兼陽瓜州刺史都知兵馬大將。」とある。

のであつて、更にその支配権の確立を達成せんがためには、やがて唐勢力の駆逐をも敢行せねばならなかつたのである。

2 南 詔 の 離 反

これまで長期に亘り親善関係を持續して来た唐朝と南詔も、遂に両者の利害対立が深化して来てその衝突は必須の形勢となつて来た。それ故、両者の決裂は時間の問題とみられるに至つたが、まもなく雲南太守張虔陀事件を契機として表面化したのである。この事件について、通鑑 卷216天宝9年12月条に次の如く述べている。

③楊国忠徳鮮干仲通、薦為劍南節度使。仲通性褊急、失蚤意心。故事、南詔常与妻子俱護都督、過雲南。雲南太守張虔陀¹⁾、皆私之、又多所徵求。南詔王閣羅鳳不応。虔陀遣人、冒辱之、仍密奏其罪。閣羅鳳忿怨、是歲、發兵反、攻陷雲南、殺虔陀、取夷州三十二。

これによれば、南詔離反の直接原因は雲南太守張虔陀の貪妄ぶりにあつたのであるが、又唐朝の雲南經營の非道なるやり方に対して、南詔は前々より忿怨していたことが察せられる。

南詔が離反するに至つた理由について、南詔徳化碑文は6ヶ条を挙げて、止むなく反抗の拳に出たものであることを次のように説明している。

④是漢積讐、遂与陰謀擬共滅我、一也。

誠節王之庶弟、以其不忠不孝、貶在長沙、而彼奏屍擬令問我、二也。

崇道蔑盟、構逆罪合誅夷、而却収録与宿欲令讐我、三也。

応与我悪者竝授官榮、与我好者咸遭抑屈務在下我、四也。

築城収質、繕甲練兵、密欲襲我、五也。

重科自直倍稅、軍糧徵求無度、務欲敵我、六也。

この南詔徳化碑文なるものは、南詔の閣羅鳳が唐官の降人鄭回をして撰文せしめ、杜光庭に書かせた南詔群臣頌徳之碑で、唐の大暦元年(766)に建てたものであり、現存の貴重な南詔史関係史料である。勿論、これは南詔側からの言い分であるから、自己弁護と言う点は考慮に入れなければならないが、それでも尙、撰文者が当時現地において実際に当時の雲南状勢を見聞していたのであるから(鄭回は雋州西瀘の令であつたが、南詔が離反した時閣羅鳳に捕えられ、後その学才あるをもつて清平官に任用され寵愛された。)、その史料価値は最も高く評価さるべきものである。この6ヶ条の理由書をもとにし、南詔が離反するに至つた諸事情を次の5点から考察を加えてみる。

1) 南詔は既に大理盆地一帯を制覇し、今や東方の昆明盆地帯をも掌握しつつあつたが、この地方は唐朝雲南經營の中心地として唐の支配権が強大であつたから、南詔にとっては雲南地方の一大勢力圏の形成上、どうしても唐勢力と対決せねばならないと言う根本的利害対立の関係があつた。

2) 北方から吐蕃の重圧が増大しつつあつて、南詔は当時保身上からも更に発展せんがためにも唐と吐蕃の何れに組すべきかと言う二者択一の立場に追い込まれた状勢下にあつたこと²⁾。

3) 当時唐朝の朝政弛緩、劍南節度使に人を得ず、更に現地在官者の悪政が挙げられる。

この頃、唐の朝政は玄宗既に年老いて政治に倦み、楊貴妃に迷つて政務を顧みず、姦臣李林甫が宰相として重要政務を壟断し、無能な楊国忠などが次第に寵せられると言う状態であつた。通鑑はかかる事態を次のように歎じている。

1) 唐書南蛮伝、旧唐書南詔伝、唐会要、南詔野史等は皆「雲南太守」といい、南詔徳化碑文、新唐書玄宗本紀には「雲南都督」となす。蛮書の卷1には「姚州都督」といい、卷4には「姚州刺史」とある。(史料④参照)ここに言う「雲南」とは「姚州」の

別称である。

2) このことは史料⑩⑪にみえるように、離唐後間もなく吐蕃に附した。恐らく南詔離反の背後には吐蕃の触手が動いていたものと思われる。

⑤上晚年自恃承平，以為天下無復可憂。遂深居禁中，專以声色自娛，悉委政事於林甫。林甫媚事左右，迎合上意，以固其寵。杜絕言路，掩蔽聰明，以成其姦。妬賢疾能，排抑勝己，以保其位。屢起大獄，誅逐貴臣，以張其執。自皇太子以下，畏之側足。凡在相位十九年，養成天下之亂，而上不之寤也¹⁾。

又、当時雲南經營の責任を負っていた劍南節度使にもその人を得なかつた。ここで問題となるのは、特に雲南經營についての識見力量及び手腕についてである。開元末年在任の王昱が、南詔より賂を受けてその六詔併合を許可したことは前掲史料②にみえているが、次に天寶初年劍南節度使を拜した章仇兼瓊は、歴代の劍南節度使中では最も雲南經營に力を注ぎ、かつ力量を發揮した方であるが、その後、蜀の大富豪たる鮮干仲通を引ききて采訪支使と為して心腹とし、彼の野心は中央政界にあり、蜀貨の珍貴なるものを京師に送つて楊姉妹に贈り、これを介して玄宗の信を得、遂に金吾兵曹參軍を与えられたと言う野心家であつたから²⁾、勿論雲南經營もいわば出世の道具に供された襪があり、当時の強引なしかも性急な經營ぶりがみられるのもこのためであつたと思われる。

次いで鮮干仲通が劍南節度使に昇格したのは天寶8～9年の頃らしく、これは当時漸くその權勢を誇つて来た楊国忠の推薦によるものであつたが(前掲史料③)、それは、楊国忠が曾つて蜀に従軍せし頃から鮮干仲通に物的援助を受けた間柄にあつたからである。彼は蜀川の新政界の大富豪で學問もあり材智も有つたが³⁾、又反面大きな短所もあつて、その配下からも輕視されていたことは前掲史料③に「仲通性褊急，失畜夷心。」といい、旧唐書 卷197南詔伝にも「仲通褊急寡謀，虔陀矯詐待之，不以礼。」とあることから窺われる。恐らく章仇兼瓊在官当時にあつても、その雲南經營は主として彼の腹心であつた鮮干仲通がその任に當つて居た節がみられるから、雲南經營失敗の事実上の責任者は仲通であつたとみなしても誤りではないと思われる。南詔討伐時代には楊国忠が劍南節度使となり、司勳員外郎崔胤を劍南留後と為したが⁴⁾、国忠は劍南を遙領したのみで現地には赴かなかつたし、彼の人物力量についてはここに改めて説く必要はないであろう。彼が行つた南詔大征討の顛末については第3項に詳しく述べられている。

更に、現地在官者で雲南經營に當る者の非行があつたことである。ここにその代表的な人物として雲南太守張虔陀が出て来たが、次に挙げる諸史料を通觀すれば、彼等が原住民に対してどのような態度で接し、又その經營ぶりがどのようなものであつたかについて、行間からよく窺うことが出来ると思う。

⑥姚州群蠻，先附吐蕃。撰監察御史李知古，請發兵擊之，既降。又請築城，列置州縣，重稅之。黃門侍郎徐堅，以為不可。不從，知古發劍南兵築城，因欲誅其豪傑，掠子女為奴婢。群蠻怨怒，蠻酋傍名引吐蕃，攻知古，殺之，以為尸祭天。由是，姚雋路絕，連年不通⁵⁾。

⑦初節度章仇兼瓊，不量成敗，妄奏是非，遣越雋都督竹靈倩，置府東爨，通路安南，賦重役繁，政苛人弊。被南寧州都督爨婦王，……中略……崇道等，陷殺竹倩，兼破安寧⁶⁾。

この他、唐初の頃ののものとしては、武徳年間の雲南東部の經營史料の中にも

⑧高祖入關，遣使定巴蜀，使者承制，拜仁壽雋州都督府長史。時南寧州內附，朝廷每遣使安撫，類皆受賄，刃人患之，或有叛者⁷⁾。

とみえ、前掲史料④に「重科自倍信稅。軍糧徵求無度，務欲散我。」とあるのも皆その証とするに

1) 通鑑，卷 216，天寶11年11月条

2) 通鑑，卷 215，天寶4年7月条

3) 通鑑，卷 215，天寶4年7月条；新唐書，卷 206 楊国忠伝

4) 通鑑，卷 216，天寶10年11月条；同書，同卷，天

寶11年11月条；旧唐書，卷9，玄宗本紀，天寶10年11月条

5) 通鑑，卷 210，景雲元年12月条

6) 南詔德化碑文

7) 旧唐書，卷185 上，韋仁壽伝

足るものである¹⁾。

結局、これら中央・地方（成都府）・現地共に弛緩非道の政治ぶりであつたことは、唐朝雲南經營の失敗に至るいわば唐朝側自身に内在せる一大原因とも言うべきものであつた。南詔は恐らく当時の唐の内政腐敗の事情をもよく察知した上で、離唐を決意したものであろうと思われる。

4) 南詔は、唐朝側の重ねて要求する労役や物資の徴求に耐えられなかつたと言う面も考えられる。この点については、前掲史料③や④の第6条の記事及び⑦の文中から十分に読みとることが出来る。殊に天宝年間には「歩頭路」の開発と言う大事業を進めていた時であるから、労役や諸種の物資の徴求が大々的に行われたものらしく、南詔は特に唐朝に附していたことと雲南中心部の支配圏を握っていたことから、その重責を背負わされていたものであろうと思う。このことは直接に南詔の人的物的資源を損耗してその支配力を弱めることに外ならないから、南詔にとつては耐えられなかつたことであらう。

5) 最後に挙げられることは、南詔對爨姓一族の關係と、これに対する唐側の態度である。前述の如く、南詔が爨姓一族の勢力打倒に着手したのは「歩頭路」開発が本格化した天宝年間に入つてからのことであるが、何しろ、爨姓一族は永い間昆明盆地帯に強固な地盤を築いており、又その一族も大世帯で、その一族内も幾つかの勢力に分れて相争つて居り、ために複雑な内情にあつた。したがつて南詔と唐側とのこれに対する方策も一致しなかつたし、その求むるところも異なるものであつた訳である。これらの事情は唐書南蛮伝下の爨蛮条、蛮書卷4西爨条及び南詔德化碑文に詳述してあるが、ここには原史料を掲げるのを略する。恐らく、唐はこの頃に至つて漸く南詔が雲南地方統一の野心あるに気づき、昆明盆地の平定にその力を利用しつつも、南詔の強大化することを喜ばなかつたのではあるまいか。南詔德化碑文中に、「乃各興師，召我同討。李宓外形中正，伴假我郡兵，内蘊奸欺，妄陳我違背，頼節度郭虚己仁鑒，方表我無辜，李宓尋彼貶流，崇道因而亡潰。」とあるのはこの間の事情を窺わせるものであると思う。何れにせよ、南詔が大理盆地帯に実勢力を確立してから後、即ち天宝年間に入つてからは、唐朝と南詔との友誼關係は以前と大分その趣を異にして来たことが推察されるのであつて、表面的友交關係の反面には、相互の不信不満が次第に醸成されつつあつたとみられる。

以上で南詔が唐朝に離反するに至つた諸事情についての考察を了えたが、ここに尙一つの問題がある。それは、この雲南太守張虔陀なる者が果して漢人だつたのか、それとも原住民の部酋が唐官に登用されていた者かと言う点である。彼の身元を語る史料は少いが、南詔德化碑文には「越萬都督張虔陀，嘗任雲南別駕，以其旧識風宜，表奏請為都督。而反誑，或中禁職起乱，階吐蕃。」と見え、その前歴が幾分知られる。ここに言う「雲南」とは「姚州」のことであるが²⁾、蛮書卷4弄棟蛮条に

⑨弄棟蛮則白蛮苗裔也。本姚州弄棟県部落。其地旧為襄州。嘗有部落首領為刺史。……中略……当天宝中，姚州刺史張乾陀（虔陀）守城拒戰，陷死殆尽³⁾。

とあるのをみれば、張虔陀なる者は以前から姚州辺に居つた白蛮種系の大部酋で、而もかつて大理盆地帯に一大支配圏を形成していた張姓大部酋の一族の後裔ではなかつたかと推察される。原住民の部酋等で都督等に任ぜられている例は他にもみられるから⁴⁾、彼が雲南太守（都督）であつたとしても不思議はない。殊に白蛮は相当の文化程度に達し中国文化に同化していたから、漢官の実用に

1) この場合に、西南辺境の在官者中には罪によつて流されたものや左遷されたもの多かつたことも考慮に入れてみるべきである。それを証する史料は通鑑等にも散見する。

2) 拙稿、唐代に於ける「雲南」の称呼、岩手史学研究、第6号参照

3) 蛮書、卷1にも「至弄棟城七十里。本是姚州，旧属西川。天宝九載，為姚州都督張乾陀附蛮所陷。」とみえる。

4) 南寧州都督は爨姓大部酋が世々任用されていたし前述の南詔の清平官張羅皮が永昌郡都督に任ぜられた例がある。

も耐えたはずである。もしそうであるとすれば、この張虔陀事件の背景に、勃興途上にある烏蛮系南詔と會つて大理盆地辺に栄えた白蛮種張姓一族の後裔たる張虔陀との対抗關係と言うことが考えられねばならない。南詔勃興をめぐる雲南の諸状勢を通観してみると、この推察は恐らく妥当なものと思われるのである。

かかる観点からすれば、天宝9年の張虔陀事件そのものは、南詔が公然と唐朝に反旗をひるがえし、その勢力に対決せんとしたのではなく、唐官の地位を利用し、唐朝の威を背景にして尙姚州辺に余勢を張り、南詔に対立していた張姓部酋の勢力打倒が当面の目標だつたことは後出史料⑩・⑪によつても窺えるところである。幾度か表を連ねて虔陀の非行を上奏しても、それを仲継する官吏によつてその意を達し後なかつた事情は南詔徳化碑文中からも知れるところであるが¹⁾、当時唐朝側が次第に南詔に対し、不信の念をいだいて来たことと相俟つて、結果的には、この事件が南詔離反の旗上げとなつたものとみられる。

3 雲南經營の挫折

南詔離反するや、唐朝は前後2回に亘り大討伐を行い、雲南の支配権を回復せんと計つた。それは雲南地方における既得権の確保と言うこともあり、吐蕃の東進を防ぐ必要もあつた。それに、もし雲南北部に強力な国家が出現すれば、蜀の地は危険にさらされる訳であるから、唐朝が南詔討伐に力を注いだのは当然のことと言わねばならない。それにしても、よく考察を加えてみると、特に玄宗の旨によつたものでもなく、又廟議の一致した指針の下に行われたものでもなく、この征討に躍起となつて強行したのは、主として楊国忠と鮮于仲通とであつたことが知られて興味深い。勿論両者共に劍南節度使の任にあつたから、これも当然のことではあろうが、しかし、ここには尙この両者にとつて雲南經營を捨て難い事由があつたのではないかと言うことを思わせるふしがある。鮮于仲通は蜀川の大富豪であり、楊国忠の一つのドル箱は仲通であつた。両者共に蜀には深い縁のある者である。蜀は天然資源の恵まれたところであるが、その地の利は西南夷の地を控えていることであり、古来当方面は僮僕の供給地、牛、馬、羊の畜産資源、鈹物資源(塩鉄の利)及び交州ルートやビルマルートによる交易の利があるところである。かくみて来ると劍南節度使が「歩頭路」の開発に力を注いだことが何を物語るものであるかに想到するであろう。この点は唐朝雲南經營の目的として別に論証されねばならない問題であるが、彼等2人が雲南地方の確保に異常の熱意をみせたことを理解するためには、かかる事情のあつたことを念頭に置かねばならないのである。以下にその征討の次第と実状をみることにする。

先づ第一回の南詔討伐行は翌年の天宝10年(751)に行われた。これにつき通鑑卷216天宝10年条には次の如く述べている。

⑩夏四月壬午、劍南節度使鮮于仲通、討南詔蛮、大敗於瀘南。時仲通將兵八萬、分二道、出戎雋州、至曲州靖州。南詔王閣羅鳳、謝罪、請還所俘掠、城雲南而去。且曰、今吐蕃大兵压境。若不許我、我将歸命吐蕃、雲南非唐有也。仲通不許。囚其使、進軍、至西洱河、与閣羅鳳戰、軍大敗。士卒死者六萬人、仲通僅以身免。楊国忠掩其敗狀、仍叙其戰功。

⑪閣羅鳳歟戰尸、築為京觀、遂北臣於吐蕃。蛮語謂弟為鐘。吐蕃命閣羅鳳為贊普鐘、号曰東帝、給以金印。

⑫閣羅鳳刻碑於国門、言己不得已而叛唐、且曰、我世世事唐、受其封爵²⁾、後世容復歸唐、当指

1) 南詔徳化碑文に次の如く述べている。「干時馳表上陳屢申冤枉、皇上照察降中使賈奇俊、詳覆屬臣無政事以貽成一信、虔陀共掩天聽、惡奏我將叛、

(南詔)王乃仰天嘆曰、……即差軍將錫羅顛等、連表控告。」

2) 唐書南蛮伝上には「累封賞」とある。

碑以示唐使者，知吾之叛非本心也。

これとほぼ同様の記述が唐書南蛮伝上にもみえ、その他このことに関する記事は旧唐書 卷197南詔伝、新旧両唐書玄宗本紀及び楊国忠伝にも述べられている。征討行の模様については通鑑の記事が要領よく述べているから、ここには他の史料との比較において問題のある点だけを取り上げて検討してみたい。

先づ、この征討行の動機に関してであるが、これは前述の如く、前年の張虔陀事件によるものであることが明らかである。ところが、旧唐書 卷106楊国忠伝をみると、「南蛮質子閣羅鳳，亡歸不獲，帝怒甚，欲討之。国忠薦閩州人鮮干仲通，為益州長史，令率精兵八万，討南蛮，与羅鳳戰于瀘南，全軍陷没。云々。」¹⁾といい、南詔大討伐の動機を質子閣羅鳳の逃亡にあるかの如く述べているが、これについては、通鑑の著者司馬光も既に通鑑考異で指摘しているように誤記であろう。前にふれてある通り、閣羅鳳は天宝7年に第5代王として即位している²⁾。

次に征討行の年代であるが、唐書南蛮伝、旧唐書南詔伝共にただ天宝10年のこととしているが、新旧唐書玄宗本紀共に同年4月条に述べていて通鑑と同じであり、これは唐軍が現地で大敗した時をもつて記したもので、夏4月壬午と月日も明記している。これに対して、旧唐書楊国忠伝にはこの出来事を天宝10年以前の如く記しているのは³⁾、必ずしも誤りとみるべきではなく、張虔陀事件後間もなく南詔討伐行が開始されたらしいから、既に前年の末から軍兵の動員が行われたことを物語るのものであると思う。張虔陀事件に関する前掲の通鑑の記事(史料③)は天宝9年12月条に載せてはあるが、これは楊国忠の推薦によつて鮮干仲通が劍南節度使になつた月を指しているのであつて、この事件は同年の出来事ではあるが、少くとも12月以前のことであつたらしいことは南詔徳化碑文からも察せられる⁴⁾。楊国忠がこの年の12月に鮮干仲通をして劍南節度使たらしめたのは、恐らく南詔征討軍を起さんがためであつたと思われる。

この征討軍の兵力についても、旧唐書玄宗本紀や新唐書楊国忠伝に「兵六萬」とあつて、通鑑の記事と異なるが、これは動員兵力8万人で戦死者6万人と明記している通鑑の記事が正しい⁵⁾。

第三に、通鑑によれば遠征軍は二つに分れて戎州路と寧遠路から雲南東部の曲靖辺に入雲し、次いで西渭河方面に進軍して大敗したことを述べているが、南詔徳化碑文には、

③節度使鮮干仲通，已統大軍，取南谿路下，大將軍李暉，從会同路進，安南都督王知進，自歩頭路入，……中略……仲通大軍已至曲靖。

とあつて、南谿路即ち戎州路⁶⁾と会同路⁷⁾即ち雋州經由の二軍の外に、更に安南都督王知進の率いる一軍が「歩頭路」より入雲したことが知られるのであるが⁸⁾、史料価値の点からみて信すべきであろうと思われる。尙、この時の南詔側と遠征軍との交渉や戦いについても同碑文に詳しく述べている。

最後に、唐軍を大敗せしめた南詔が吐蕃から日東王に封ぜられた年代であるが、これが事情につ

1) 新唐書，卷206，楊国忠伝もほぼ同様に述べている。
2) もし皇太子が質子になつていたとするならば，鳳迦異であるが，彼も父の即位と共に唐より上卿兼陽瓜州刺史都知兵馬大將軍を授けられ，入朝の事實は認められるが(南詔徳化碑文)，他の信すべき史料に逃亡したらしいことを述べているものはない。
3) 唐会要，卷99，南詔蛮条にも天宝9年の如く記している。
4) 滇雲曆年伝卷4には，虔陀の死を天宝9年10月としている。
5) 南詔野史も通鑑と同様に記している。尙唐書南蛮

伝上に兵力の数は明記していない。

6) 唐代戎州は南溪郡とも称された。

7) 唐天宝初会川県(今の四川省南端の会理県の地)に会同軍を置いた。(前稿第1項参照)

8) 「歩頭路」開發がどの程度進められていたものかを推察する為に注目すべき史料である。歩頭路經由は明記していないが，天宝8年特進何履光が安寧の境を平定の為十道の兵を率いて遠征した時も，蛮書卷7には安南より入雲したとある。(前稿第3項参照)尙，同書同卷に彼が更に天宝10年にも安寧遠征の如くあるのは王知進との誤りであろう。

いても同碑文に詳記しており、「贊普鐘南國大詔」に冊詔されたのを天宝11年正月1日とし、南詔はこの年贊普鐘元年と改元したと言うことである。

尙、前掲史料③によれば、天宝9年閣羅鳳が張度陀を襲つた時に夷州32を取つたとあるけれども¹⁾、この時唐朝配下の州県が完全に南詔の手中に帰した訳ではなく、今回の戦役が南詔にとつて正面から唐朝と対決したものとみなすべきである²⁾。

かくて唐の征討行は大敗を喫したが、楊国忠は仲通をかばい、其の敗状を匿し、更に戦功を敘せしめて天下の耳目を掩い、玄宗に請うて自ら劍南節度使の任を領し³⁾、さすがに雲南の功なきを恥じて南詔討伐に尽力した⁴⁾。天宝10年4月の大敗戦後から同11年・12年の約3ヶ年間を通じ、楊国忠はこの為に異常な努力を払つたことが知られる。

即ち、通鑑には前掲史料⑩の続文に

⑩(天宝十載夏四月)制、大募兩京及河南北兵、以擊南詔。人聞雲南多瘴癘、未戰、士卒死者什八九、莫肯應募。楊国忠遣御史、分道捕人、連枷送詣軍所。旧制、百姓有勲者、免征役。時調兵既多、国忠奏、先取高勲。於是行者愁怨、父母妻子、送之所在、哭声振野。

とあり、もつて国忠の狂奔ぶりが知られる。この間しばしば雲南地方に兵を動かしていたらしいことは通鑑 卷216天宝11年条に

⑪六月甲子、楊国忠奏。吐蕃兵六十萬、救南詔。劍南兵、擊破之於雲南、克故臨州等三城、捕虜六千三百。以道遠、簡壯者千余人、及酋長降者、献之⁵⁾。

とあり、国忠の奏言なれば「吐蕃兵六十萬」を破つたなど、どの程度のことかそのまま信じ兼ねる点もあるが、この他に「南詔寇邊、蜀人請楊国忠赴鎮」と言う状態だつたので、自ら蜀に赴かんとしたこともあつたし⁶⁾、南詔徳化碑文に

⑫(贊普鐘)二年、漢帝又命漢中郡太守司空襲礼、内使賈奇俊、帥師再置姚州、以將軍賈瑾為都督。……中略……遂差軍將王兵各、絶其糧道、又差大軍將洪光乘等、神州都知兵馬使論綺里徐、同圍府城。信宿未踰破如拉朽、賈瑾面縛、士卒全馭。

とあつて、天宝12年に姚州の回復を試みて失敗している。南詔側には常に吐蕃があつたことを注意すべきである。

かように、幾度か雲南の支配権を奪回せんと試みたにもかかわらず、その効が挙らなかつたので、天宝13年に至り再度南詔討伐のために大軍を派遣したが、これ又惨敗に終つた。通鑑 卷217天宝13年六月条に次の如く述べている。

⑬侍御史劍南留後李宓、將兵七萬、擊南詔。閣羅鳳誘之深入、至大和城、閉壁不戰。宓糧尽、士卒罹瘴疫、及飢死、什七八。乃引還。奮追擊之、宓被擒、全軍皆没。楊国忠隱其敗、更以捷聞、益發中国兵討之。前後死者、幾二十萬人、無敢言者⁷⁾。

⑭上嘗謂高力士曰、朕今老矣。朝事付之宰相、辺事付之諸將、夫復何憂。力士對曰、臣聞、雲南

1) 唐書南蛮伝上には「取姚州及小夷州凡三十二」とあつて、姚州も占拠したとある。

2) 新唐書、卷5、玄宗本紀、天宝10年条には「四月壬午、劍南節度使鮮于仲通、及雲南蛮戰于西洱河大敗績、大將王天運死之、陷雲南都護府(姚州)」とあり。又南詔野史卷上には、天宝11年に「發人口百戶於浪穹築白崖險城、又遣兵攻掠安寧。」とみえる。

3) 通鑑、卷216にこれを天宝10年11月のこととしている。(旧唐書玄宗本紀にもある)

4) 新唐書、卷206、楊国忠伝。

5) 新唐書、卷5、玄宗本紀；同書、卷216上、吐蕃

伝にもみえる。前者には「六月壬午」のこととし、又「故洪城」と記し、後者には「故洪州」に作る。通鑑考異には実録によつたとある。尙兩者には「六十萬」とは言つていない。

6) 通鑑、卷216、天宝11年10月条及び新唐書、卷206、楊国忠伝。

7) この時の惨敗ぶりは旧唐書、卷106、楊国忠伝にもよく伝えられている。

尙、この時にも南詔徳化碑文には「時神川都知兵馬使論綺里徐、來救、已至巴躡山」等と見えて、吐蕃が加勢していることが知られる。

數喪師，又辺將擁兵太盛。陛下將何以制之。臣恐一旦禍發，不可復救。何得謂無憂也。上曰，卿勿言，朕徐思之。

この大遠征軍の大敗は唐朝に対し重大な影響を与えたものであるから、両唐書玄宗本紀を始め、關係史書に皆述べられているが、その事態は上掲文だけからでも充分に窺うことが出来るであろう。いかに多数の無辜の人民を失い、物資を消耗し、当時の人々がこれを怨苦したかは前掲史料⑭にもありありと見受けれるが、彼の白楽天が「新豊折臂翁」と題する詩において、

新豊老翁八十八，頭鬢眉鬢皆似雪，玄孫扶向店前行，左臂馮肩右臂折，……中略……無何天寶大徵兵，戶有之丁点一丁，点得馮將何處去，五月万里雲南行，聞道雲南有瀘水，椒花落時瘴煙起，大年徒涉水如湯，未過十人二三死，村南村北哭声哀，兒別爺娘夫別妻，皆云前後正蠻者，千万人行無一廻，是時翁年二十四，兵部牒中有名字，夜深不敢使人知，偷將大石鑿打臂，張三簸旗不堪口，從茲始免征雲南，云々。

と詠つて、当時の庶民の生々しき苦難怨苦ぶりをよく表現している¹⁾。

ところで、南詔徳化碑文には賛普鐘3年(天寶13年)条に「漢又命前雲南郡都督兼侍御史李宓，広府節度何履光，中使薩道懸，云々。」とみえ、通鑑卷216 天寶1年2月壬辰の条にも、「以左武衛大將軍何復光，將嶺南五府兵²⁾，擊南詔。」とあるから、この時も又唐の南方軍が「歩頭踏」より入雲したことが知られる。但し、通鑑がこれを天寶12年5月条に述べているのは1年許りの時間的ずれがあり、不可解である。或いはこれは征討行の命が出た年月を指したものであろうか。

かくて、唐朝は数次に互る雲南大遠征も連敗に屢し、楊国忠も漸くこの敗状を掩い得なくなつたその翌年に安祿山の乱起り、唐朝は雲南を顧みる余裕なく、ここに雲南經營は完全に挫折するの止むなきに至り、唐初以来 140年間に及ぶ雲南支配に終止符が打たれたのである。南詔は翌年雋州の会同軍を取り、以つて越折の殘党を破り、更に雋州をも攻略し、興隆の道をたどつて行くのである³⁾。

會つて蠻夷の地とみなされていた雲南地方に勃興した南詔がかくも連勝して、さしもの唐朝を悩ませたのはいかなる事情によるものであろうか。これについても種々の理由を挙げ得るが、主要なものとして次の四点を指摘することが出来る。

第一に、唐それ自身に内在せる悪条件である。玄宗が既に年老いて政治を顧みなかつたことや藩鎮の憂が増大していたことは、前掲史料⑱の高力士との対談からも充分窺えるところであり、当時國務の枢要に携つた李林甫については前述したが、彼の死後、その実権を握つた楊国忠は論ずるに足らず⁴⁾、當時は久しく泰平が続いたので兵制も廢れ、唐の軍隊が弱かつたことも不利な条件であつた。李林甫は辺將が入りて宰相になるを恐れて無学なる胡人を將とするの策をとり⁵⁾、為に漢人に名將少く、他方兵の方も通鑑卷216天寶8年4月条に

⑱其折衝果毅，又歷年不遷，士大夫亦恥為之。其彊騎之法，天寶以後，稍亦變廢，應募者，皆市井負販，無頼子弟，未嘗習兵。時承平日久，議者多謂，中国兵可銷。於是，民間挾兵器者有禁。子弟為武官，父兄擯不齒。猛將精兵，皆聚於西北，中国無武備矣。

と歎じている状態であつた。それに加えて、雲南遠征軍なるものは前掲史料⑭にある如く⁶⁾、楊国

1) 唐の高適著「高常侍集」卷上にも「李雲南征蠻詩」並序があつて、天寶10年の征討行の時の苦戦ぶりを詠つているが、その文中に「前略……餉道忽已遠，累軍垂欲窮，精誠動白日，憤薄連蒼穹，野食掘田鼠，肺癆兼雙僮……後略」とみえる。

2) 同書の註に「広，桂，邕，容，交」とある。

3) 唐書南蛮伝上；南詔徳化碑文；南詔野史卷上。

4) 楊国忠は天寶11年11月右相兼文部尚書に任ぜられた。(通鑑，卷216)

5) 通鑑，卷216，天寶6年12月条。

6) 新唐書，卷206，楊国忠伝にも「国忠令当行者，先取勳家，故士無鬪志。……中略……郡县吏窮無以応，乃詭設餉，召貧弱者，密縛置室中，衣絮衣絨而送屯，亡者以送吏代之。人人恩乱。」とある。

忠の徴兵方法は誠に拙劣であつた当に、軍兵に精気なく¹⁾、皆これを厭苦したことは前掲の白樂天の詩がよく物語つている。かような軍兵では、例え多数でも多くは期待されなかつたであろうと思う。

第二は雲南遠征における自然条件の不利である。山岳疊々狭谷深く幾多の河川あるに加えて、交通不便な時代であり、まず入雲するだけでも非常に困難なことであり、現地では炎暑にて瘴癘の氣に遭遇したり、かつ又、遠路交通不便の為に糧道も絶えがちだつたと思われる。その上に、再度の征討行は雨期に當つていた。雲南の雨期は5月より10月までであるから、第1回目の旧曆夏4月も第2回目の同6月も雨期だつた訳で不利だつたと思われ、瘴癘の氣や河川の増水が考えられる。

第三は吐蕃が南詔を背後から加勢したことである。尙、当時の南詔としては吐蕃の援助なしに唐の大軍を破ることは容易でなかつたと思われる。吐蕃の南詔援助については既に述べた通りである。

第四は南詔軍の強力な点である。南詔の国家体制は国民皆兵で軍国主義的であり、既に鉄製武器も有してその訓練も厳しかつた。それに閣羅鳳は文武兼備の優れた王でもあり、南詔軍の力は確かに侮り難いものがあつた。これはその後唐末蜀川や安南への入寇の際に証明されたのである。

〔附 記〕本研究は、昭和30年度及び31年度文部省科学研究費交付による総合研究「六朝隋唐時代の社会構成と思想宗教」の分担課題「唐代文化の対外的展開——南詔の場合——」に関する研究の1部である。

1) 兩議の一致した方策もなく、楊国忠が独断的に名利の為に強行した観がある。